
私の大好きなお姉ちゃん

しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の大好きなお姉ちゃん

【Nコード】

N7342P

【作者名】

しのぶ

【あらすじ】

お姉ちゃん大好き！ お洗濯もお料理も、お姉ちゃんが笑顔になる事なら何だって楽しい！ 梓ちゃんも純ちゃんも可笑しいって言うけど、楽しいんだから仕方が無いわよね。 自分でもどうしてなのか分からないけど、お姉ちゃんと一緒に居るだけで幸せな気持ちになれるんだもん・・・って「あらすじになってない！」ってツツコミ入れられそう・・・

（前書き）

憂ちゃんは どうしてお姉ちゃんの事が大好きなのか？

「女の子が好き」なんじゃなくて「お姉ちゃんだけが好き」
理由は分からないけど何をされても許せちゃう。

物心が付いた時からとにかくお姉ちゃんが大好き。

そんな無意識の中の理由を考えてみましたけど・・・途中少しだけ
重いかもしれません・・・

それでもいいと覚悟を決めた方のみ本編へどうぞ

もうすぐ期末テストだと言う事もあって、今日は軽音部もジャズ研も部活はお休みみたいです。

なので私達3人は久しぶりに一緒に帰る事にしました。

暫く歩いてると純ちゃんが突然お姉ちゃんの事について聞いてきました。

純 「憂ってさあ、いっつも唯先輩のお世話ばかりしてて嫌になんない？」

憂 「え？ どうしたの急に？」

純 「急にって言うか、前から思ってたんだけど、憂は自分のやりたい事とか全部我慢して嫌々家事とかしてるんじゃないかなって」

憂 「そんな事ないよ、私お姉ちゃんのお世話するのが好きだし、お洗濯とかお料理とか凄く楽しいし・・・そもそも私のやりたい事って言うのがお姉ちゃんのお世話だし」

純 「だからそれが分かんないんだよねえ」

梓 「確かに唯先輩って全身から『放って置けないオーラ』出してるからついつい助けたくなるけど、毎日となるとちよつとねえ・・・」

憂 「そうかな？ お姉ちゃんの笑顔を見ると私も幸せな気分にな

るから、半分は自分の為にやってるようなものだし」

純 「流石だねえ、そこまで行くともう前世で何かあったとしか思えないよね」

憂 「前世？」

純 「例えば唯先輩と憂の前世は女王様と奴隷だったとか」

梓 「奴隷は喜んでお世話したりしないでしょ？」

純 「じゃあ娼婦とそのヒモとか」

梓 「何それ・・・」

純 「あと考えられる組み合わせと言ったら」

梓 「そんなに憂と唯先輩の前世が気になるんだったら、これ行ってみる？」

そう言う梓ちゃんが、近所のスーパーに新しく出来た『占いコーナー』のチラシを鞆から取り出して私達に見せました。

梓 「ここ色んな占いのお店が集まってるんだって、その中の1つに『前世占い』って言うのがあるみたい」

純 「おもしろそう、みんなで行って占ってもらおうよ」

憂 「でも、私晩ご飯の用意しなきゃいけないし・・・」

純 「そんな遠くないし、時間かかんないって！」

憂 「・・・うん・・・じゃあ少しだけね」

スーパーの2階に行くと一角に占いのお店が5件並んでいて、平日だと言うのに女性客で結構賑わっていました。

憂 「ここって前は100円均一ショップとゲームコーナーじゃなかった？」

純 「女性客を集めるために改装したんじゃない？」

梓 「ねえねえ、こっちに前世占いのお店あったよ」

純 「よし、突撃〜！」

中に入るとそこは意外とスッキリとした、あまり飾り気の無いお部屋でした。

純 「あれ？ 想像してた雰囲気と違うね」

梓 「うん、もっとこう真っ暗で怪しい感じかと思ってたけど」

憂 「雰囲気でごまかさない分、内容で勝負って事で結構当たるの

かもしれないね」

奥の机を見るとそこには30歳くらいの女の人が座っていて私達に声を掛けてきました。

『はい、いらっしやい・・・で今日は誰の前世から調べて欲しいのかしら?』

純 「じゃあ、まずは梓からね」

梓 「ちよつと、どうして私が最初なのよ?」

純 「いいじゃない、どうせみんな占ってもらうんだから」

『分かりました・・・じゃあまずはあなたの前世から見てみましょう』

そう言うとなりの人は水晶を覗き込み何やら呪文のような言葉を小声で呟き始めました。

『あなたの前世は・・・ネコです』

純 「ブッ!・・・そのまんまじゃん!」

憂 (プフ・・・クク・・・ククク)

梓 「何よ二人とも！ 笑うならちゃんと笑いなさいよ！」

『飼い猫ではなく野良の黒猫だったあなたは、気が強く自分で何でもやってしまいがちですが反面、人恋しくて甘えん坊な性格を現世に持って来ています』

純 「あたってる・・・」

梓 「うそ?! 私ってそんな性格？」

憂 「うん」

梓 「うんって・・・そんなあっさりと・・・」

純 「じゃあ今度は私の前世を見てもらえますか？」

『はい、では次はあなたの前世を見てみましょう・・・』

女の人はまだ水晶を覗き込み呪文を唱えました。

『あなたの前世は・・・又焼です』

純 「はい？ チャ？ え？」

『チャーシューです』

純 「又焼ってあのラーメンに入ってる？」

『そうです』

梓（プププ・・・プククク・・・クククク・・・）

梓ちゃんが必死に笑うのを我慢してます・・・顔を真っ赤にしてとても辛そうです。

そう言う私もさつきから既に呼吸困難に陥って死にそうです・・・助けてお姉ちゃん・・・

純 「豚って言うならまだしも又焼って何なんですか！」

『豚の時は別の魂が入っていました、その後、美味しく煮込まれた事により新たな魂が生まれ・・・』

梓（ククククク・・・息が・・・笑うの我慢しすぎて息が出来ない・・・ククク）

梓ちゃんも私も息ができなくてもう限界です・・・

その時、私の頭の中に今までの思い出が走馬灯のように蘇ってきました・・・アイスをねだるお姉ちゃん・・・ゴロゴロするお姉ちゃん・・・コタツで寝てるお姉ちゃん・・・

私の走馬灯ってお姉ちゃんばかり・・・

それしにても前世を見に来たのに、あの世を見る事になるなんて・・・シャレになりません・・・

純 「もういいわよ！ 次！ 憂！」

最後は私が見てもらいました・・・もし「あなたの前世は煮玉子です」とか言われたらどうしよう・・・でもそれだったら純ちゃんと仲良しなのも納得できるかも・・・

『あなたには・・・お姉さんが居ますね？』

憂 「え？ は、はい」

『あなたは昔からずっとお姉さんに守られています』

純 「唯先輩が守ってる？ 反対じゃん」

梓 「そうだね、憂の方が唯先輩を守ってるって言うなら分かるけど」

『前世でもあなた達は仲の良い姉妹でした・・・お姉さんはいつも自分の身を犠牲にして妹の事を守ってきました・・・前世で魂を削りすぎた為、現世でのお姉さんは休息状態にありますが、それでもあなたを守る気持ちは大きく、その想いはいつもあなたを包み込んでいます・・・あなたはそんなお姉さんが大好きですね？』

憂 「大当たりです！ 完璧です！ パーフェクトです！」

梓 「ちょ、ちょっと憂」

純 「いいから落ち着きなさいよ！」

そっかぁ・・・私とお姉ちゃんって前世でも姉妹だったんだ・・・
前世のお姉ちゃんもきつと可愛いんだろぅなぁ・・・

梓 「憂・・・お店を出てからずっとニヤニヤしてるの気持ち悪い
よ・・・」

憂 「うふふふふ・・・えへへへ・・・」

純 「だめだ・・・壊れた・・・」

梓ちゃん達と別れた後、私は晩ご飯のお買い物をして家に帰りました。

着替えを済ませてソファに腰を下ろすと突然睡魔が襲ってき
ました・・・少し疲れたんでしょうか？ 私はいつの間にかウトウト
と眠っていました。

その時、私は不思議な夢を見ました・・・

ああ、これは夢なんだ・・・なんとなくそんな事を思いながら見ている夢・・・

ぼんやりと見下ろしているそこは一面の焼け野原で・・・まるで戦時中のようなです・・・

数多く横たわる死体・・・炎を吹き上げ燃える建物・・・真っ赤に染まる空

そんな中、大切な物を・・・両親も家も全てを失い泣き叫ぶ2人・・・

中学生くらいの女の子と、幼稚園くらいの小さな女の子・・・

【うわあああああん、おねえちゃん】

【大丈夫！ お姉ちゃんがついてるから！ お姉ちゃんが絶対に守ってあげるからね】

【家の跡にお芋が少しだけ落ちてた・・・良かった・・・】

【おねえちゃん、おなかすいたよお】

【うん、今お芋を焼いてあげるから少し待っててね】

【うん】

【はい、焼けたわよ】

【わーい、いただきますーす・・・あれ？ おねえちゃんはたべないの？】

【お姉ちゃんまだお腹すいてないの、だから気にしないで食べていのよ】

【うん】

【おいしい？】

【おいしいよ、えへへへへへ】

【すみません、少しでいいので食べ物を分けてもらえませんか？】

『こんな時に他人に食べさせるような物はないよ！』

【お願いします！　お願いします！　妹がお腹をすかせているんです！　お願いしますから】

『みんなお腹が減ってるんだよ、いいからあっちへ行きな！』

『泥棒〜！　待て〜芋泥棒〜！』

【はあはあはあ・・・】

『捕まえたぞ！　うちの畑を荒らすなんて許さん！』

【ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい】

【おねえちゃん・・・おなかすいたよお・・・】

【もう3日も食べてないものね・・・ごめんね・・・】

【おねえちゃん・・・どこいくの？】

【・・・すぐ戻ってくるから・・・もう少しだけ我慢してね】

【・・・あの・・・お金でも食べ物でもいいので・・・私を・・・
買って・・・】

【あ、おねえちゃん・・・】

【はい・・・食べ物よ・・・】

【おねえちゃん、ないてるの？】

【ううん・・・泣いてないから・・・何でもないから・・・】

【でも、おねえちゃん・・・なみだがいっぱい】

【大丈夫よ・・・お姉ちゃんどんな事をしても絶対にあなただけは守るからね】

【そんなつよくだっこしたらくるしいよお】

『空襲だ〜！ 防空壕へ非難しろ〜！』

【おねえちゃん、こわいよお〜】

【お姉ちゃんがついてるから！ 早くこっちに来てお姉ちゃんの前
に隠れて！】

『うわあああ！』

【おねえちゃん、おけがしたの？ せなかから、ちがでてる・・・】

【これくらい平気だから、あなたに怪我が無くて本当に良かった】

【ここから出して！ どうして防空壕が崩れるのよ！ 妹が！ 妹
が死んじゃう！】

【・・・おねえ・・・ちゃん・・・さむいよお】

【お姉ちゃんが傍に居るから！ ずっとずっと抱きしめてあげるか
ら頑張って！】

【えへへ・・・おねえちゃん、あったかいね】

【すぐ出られるから！ お外に出たらすぐお姉ちゃんがお芋貰って

きてあげるから！ だから頑張って】

【・・・・・・・・・・・・・・・・・・】

【やだ・・・やだやだやだ！ 目を覚ましてよ！】

【・・・・・・・・・・・・・・・・・・】

【お願いだからお姉ちゃんを置いて行かないで！ 誰か！ 誰か妹を助けて！】

【・・・・・・・・・・・・・・・・・・】

【心配しなくても大丈夫よ・・・お姉ちゃん絶対に離れたりしないから・・・ずっとずっと傍に居てあげるから・・・】

【・・・・・・・・・・・・・・・・・・】

【今度生まれ変わる時も、私はあなたのお姉ちゃんだからね・・・今度は幸せな時代に生まれましょうね・・・】

(・・・うい・・・)

(うい・・・こんな所で・・・風邪・・・ちやう・・・)

憂 「・・・」

唯 「憂、こんな所で寝てると風邪ひいちゃうよ」

憂 「お姉ちゃん・・・」

唯 「どうしたの憂？ 涙いっぱい流して！ 何かあったの？」

そっか・・・私夢を見てたんだ・・・

憂 「ううん、何でもないの、それよりお腹すいたでしょ？ 今すぐ作るから先にお風呂でも入って待っててね」

唯 「ねえ憂、一緒にお風呂入ろうよ」

憂 「え？ だって私今からご飯の用意しなきゃ」

唯 「今日はピザでも頼めばいいじゃない、一緒に入ろうよお」

憂 「もう、しょうがないわね」

唯 「えへへへへ」

甘えん坊のお姉ちゃんって可愛い・・・

湯船でしっかり温まってお姉ちゃんが体を洗い始めました。
お姉ちゃんの肌って凄くキメが細かくて綺麗・・・

憂 「あれ？」

唯 「ん？ どうしたの？」

憂 「お姉ちゃん、背中に赤いアザが・・・怪我でもしたの？」

唯 『ううん・・・これは空襲の時の爆風で・・・』

憂 「え?! 空襲?」

唯 「ほえ?」

憂 「お姉ちゃん、空襲ってどう言う事?!」

唯 「へ? くうしゅう? 何それ?」

憂 「何って・・・今お姉ちゃんが言ったんじゃない」

唯 「私そんな事言わないよぉ・・・背中のことって小さい頃からあって、お風呂なんかで温めると赤く浮き上がってくるんだよぉ」

憂 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そうか・・・夢で見た2人って、生まれ変わる前の私とお姉ちゃんだったんだ・・・

お姉ちゃんはずっと私の事を守って・・・私の事だけを考え自分を傷つけて・・・

憂 「お・・・お姉ちゃん・・・」

唯 「どうしたの憂?」

憂 「うええええええええええん」

唯 「ちょ、ちょっとどうしたの？」

お姉ちゃんは驚いてあたふたしてましたけど、私は涙を止める事が出来ませんでした。

憂 「うええええええええええん」

唯 「やっぱりさっき怖い夢を見てたんだね・・・大丈夫だよ憂、私が傍に付いててあげるから・・・ずっとずっと守ってあげるから」

憂 「うえええええええん、おねえちゃ〜ん」

その日の夜、お姉ちゃんは私と一緒に寝てくれました。
眠りにつくまでずっと抱っこして、頭を撫でてくれて・・・凄く幸せな気持ちでした。

自分でもどうしてこんなにお姉ちゃんの事が好きなのか、どうしてお世話するのが楽しいのか分からなかったけど、今日、ようやくその理由が分かりました。

一 翌日の朝、通学路にて 一

梓 「憂〜、おはよ〜」

憂 「梓ちゃんおはよ」

純 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

憂 「純ちゃん元気ないね・・・」

梓 「今日、帰りにラーメンでもおごるから元気だしなよ」

純 「ラーメン？・・・」

梓 「純、ラーメン嫌いだった？」

純 「梓・・・あんたって子は・・・」

梓 「??」

純 「前世で私の家族だったかもしれない又焼を！ 恋人だったかも知れない又焼を食べようって言うの！」

憂 「純ちゃん・・・まだ気にしてたんだ・・・」

梓 「あははははは」

純 「笑うな〜！」

前を見るとお姉ちゃんと和ちゃんが歩いていました。
振り向いて優しく微笑むお姉ちゃん。
いつも私の事を守ってくれてるお姉ちゃん。

私・・・お姉ちゃんの妹で本当に良かった・・・私は世界で1番の幸せ者です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7342p/>

私の大好きなお姉ちゃん

2010年12月31日01時25分発行